

発展途上国と貿易紛争

山崎 國光 *Kunimitsu Yamazaki*

(財)国際貿易投資研究所 専務理事

グローバル化が進展する中で WTO の紛争解決手続き件数は依然として多い。95 年の WTO 設立以降 2002 年 1 月末までの紛争解決手続き件数は 244 件に達し、年平均 35 件と GATT 時代の年平均 7 件に比べ大幅に増加している。ただし、正確にみても、97 年の 47 件をピークに 2001 年には 27 件と漸減の傾向にある(注 1)。紛争件数が多いことはグローバル化の流れに棹差す動きになっているのであろうか。それとも、発展途上国の協定履行能力、いわゆるキャパシティ・ビルディングが向上し、ルールに基づく多角的自由貿易体制が一層進展しつつあることを意味するのであろうか。

わが国政府は、貿易紛争が生じた場合、国際的に合意されたルールに基づいて解決することを一貫して主張してきた。このルール志向の考え方が WTO 協定として結実し、95 年の WTO 発足後、先進国、発展途上国を問わず、貿易紛争を WTO の紛争解決手続きを通じて解決しようという傾向が強まっている。そして、WTO はルールに基づき多角的貿易体制に安定性と予見可能性を与える機関としておおむね満足すべき機能を果たしてきたと評価している。他方、幾つかの課題も存在するとしている。例えば、アンチ・ダンピング協定について、これまでの各国のアンチ・ダンピング法制の運用実績を踏まえつつ、協定のさらなる規律の強化が必要であるとされている。また、投資分野等、これまで協定で必ずしも十分カバーされていない分野に関する新たなルールが必要であると、その交渉

を推進し、WTOが自由貿易体制の発展、強化のための普遍的な機関になるために積極的な役割を果たすとしている。

紛争解決手続き件数の先進国と発展途上国の割合は7対3となっている。先進国の案件が多いが、ブラジル、インド、アルゼンチンの案件が増えている。中国は本年4月、米国鉄鋼セーフガード問題で初めて申し立てを行ったが、今後、中国関係の案件は増加することが予想される。中国政府が今後米国政府に習った（follow）農業保護政策をとることを示唆していることからもうかがうことができる（注2）。

これまで、先進国は発展途上国に市場の開放を説く一方で、繊維や農産物など発展途上国の製品に対しては市場を閉ざしつつげた。また、市場原理を説く一方で輸入品に対して国内産業を保護するためにAD政策等を乱用してきた。グローバリゼーションの終焉を説く人々の大きな論拠となっている（注3）。経済のグローバル化の下では、発展途上国は国際経済システムに組み込まれざるを得ない。本年のカナダでのサミットでは発展途上国の民主化や市場経済化の進展度合いによる援助政策が確認された。しかし、グローバル化の潮流は、発展途上国の経済システムを崩壊させるリスクを有している。グローバル化の進展する中で発展途上国の先進国との格差はかえって拡大している。そして、市場経済化、自由貿易という原理も問われ続けている（注4）。

発展途上国のグローバル化と経済発展には長期的視野に立った政策と緊急の政策があるとすれば、WTOのルール運用は、各国固有の事情に配慮し、グローバル化の促進に伴う種々のリスクを最小限に抑制するものでなければならない。とくに紛争解決手続きは、緊急の措置として発展途上国の経済発展に寄与するようにワー

クさせることが望ましい。シカゴ大のハッセン教授が説くように、グローバル化のあるべき姿とは固有の価値、文化、システム等との調和であるとする(注5)。

グローバル化を進展させるためには発展途上国の歴史、システムを無視するわけにはいかない。発展途上国が固有の価値、システムとグローバルスタンダードとを調和させながら、グローバル化を目指すことが必要である。紛争解決手続きを発展途上国こそが活用し、それを彼等のグローバル化への一里塚としなければならないと考える。

ジョセフ・E・スティグリッツ コロンビア大教授が説くように、グローバル化は貧しいものが恩恵を受け、貧困を解決するものでなければならない(注6)。発展途上国のキャパシティ・ビルディングの向上とWTOシステムの活用、そして投資や競争、環境といった新たなルールづくりへの積極的な参加、対応が望まれる。

(注1) 経済産業省通商政策局編「2002年版不公正貿易報告書」2002年3月29日

(注2) <http://news.bbc.co.uk/hi/english/business/newsid>

(注3) ハロルド・ジェイムス著、高速裕子訳「グローバリゼーションの終焉」

(注4) ジョセフ・E・スティグリッツ著、鈴木主悦訳「世界を不幸にしたグローバリズムの正体」2002年5月、徳間書店

(注5) サスキア・サツセン著、伊豫谷登士翁訳「グローバリゼーションの行方」

(注6) <http://www.time.com/time/asia/biz/interview/o>